

2012 年度報告書（研究員）

氏 名	中原久美子
職 位	GCOE 研究員（短時間）
<p>研究概要</p> <p>2012 年度に執筆した論文は 3 本である。1 本は新規作成，残りの 2 本は 2007 年 6 月に学会発表を行った議論を論文化したものと 2011 年 8 月に京大経済学会からモノグラフとして出していたものを査読誌に投稿できるレベルに書き改めたものである。</p> <p>それぞれ「ポーター仮説と企業間競争—日本の RAC 産業を事例に」（新規作成）、「ロードレース的技術進化のプロセス—日本のルームエアコン産業を例に—」（2007 年に組織学会にて発表）、「技術評価の変化と技術の優位性の顕在化—ダイキン工業㈱のスイング圧縮機とうるとさららの開発を例に」（2011 年京大経済学会モノグラフ）である。ここではポーター仮説と企業間競争—日本の RAC 産業を事例に」の研究内容について説明する。</p> <p>当研究の目的は、技術開発に対する規制の影響は企業間競争によって変化することを、日本のルームエアコン(以下 RAC)産業の事例を用いて議論することである。規制と技術進化あるいは競争優位に関する既存の議論として有名なものに「ポーター仮説」がある [Porter,1991] が企業に優位性をもたらすものとして規制の影響をポジティブにとらえたこの仮説に対しては賛否両論がある。既存研究では、規制が企業活動やその成果にどのような影響を与えるかについて、規制—効果（技術進化、競争優位）という直接の対応関係でとらえているが、現実には生じている事象をよりの確に説明するためには、規制を背景にした企業間競争が技術進化や技術そのものに影響を及ぼすという関係性を考慮に入れる必要がある。そこで 1970 年から 2005 年までの約 35 年間の日本の RAC 産業における規制と技術進化との相互作用に焦点を当て、事例研究を行った。その結果、規制の影響はダイレクトに結果として出にくく、企業間競争によって技術開発に対する規制の影響が変化すること及び、規制と企業パフォーマンスへの影響を議論する上では、企業間競争という要素抜きでは現実を十分に反映出来ないことを指摘した。これまで十分に議論されてきたとは言い難い、規制の技術進化への効用について一定程度の補足が出来たと考える。</p> <p>業績リスト（著書，論文，報告，その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p><論文></p> <p>「ポーター仮説と企業間競争—日本の RAC 産業を事例に」 （京都大学経済学会「経済論叢」投稿中）</p> <p>「ロードレース的技術進化のプロセス—日本のルームエアコン産業を例に—」 （組織学会「組織科学」2013 年 1 月中旬に投稿予定）</p> <p>「技術評価の変化と技術の優位性の顕在化—ダイキン工業㈱のスイング圧縮機とうるとさららの開発を例に」 （研究・技術計画学会「研究・技術計画」2013 年 3 月を目途に投稿予定）</p>	